

気がつけば、ここにいた。



旅はまだ、続いている。

long long journey

Kanaye Nagasawa
EXHIBITION 2024 - 2025

10th
ANNIVERSARY

薩摩藩英国留学生記念館
開館10周年記念特別企画展

長沢 鼎展

会場
薩摩藩英国留学生記念館

2024 — 2025 —
11.2 SAT ▶ 6.30 MON

令和の世に蘇る、 薩摩スチューデントの軌跡。

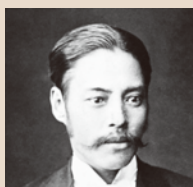
令和2年度特別企画展

村橋久成展「残響」

まだ誰も、その男の全てを知らない。



youtube



村橋久成 (1842-1892)

日本初のビール会社(現サッポロビール)を設立したのち、突然行方をくらまし非業の死を遂げた村橋久成の数奇な人生の軌跡と、生涯をかけて久成の残響を追い求めた北海道在住の作家、故・田中和夫氏の情熱の歴史を紹介。



令和3年度特別企画展

五代友厚展「RED HEART 赤き心」

それは、破壊か創造か。



youtube



五代友厚 (1836-1885)

藩に上申書を提出し英国留学生を実現させた五代友厚。大阪商会議の初代会頭を務めるなど財界に多大な貢献をした彼の、幼少時代の逸話や、払い下げ事件の真相など、長崎・大阪・鹿児島の関係者の証言を集めながら解き明かす。



令和4年度特別企画展

町田久成展「守るひと」

守ることではか、つくれない未来があった。



youtube



町田久成 (1838-1897)

東京国立博物館の創設に尽力し初代館長を務めるも、突然辞職し仏門に入った住職として生涯を閉じた町田久成。子孫の方々とともにゆかりの地を訪ね、久成が何を守り、何を伝えようとしたのかを、さまざまな角度から探った。



令和5年度特別企画展

松村淳蔵展「律するとは？」

波を越え、海を渡り、守り続けた約束があった。



youtube



松村淳蔵 (1842-1919)

30年前、一人の女子大生が松村をテーマに発表した卒業論文。論文の主・高橋史子氏をナビゲーターに、ゆかりの地や子孫との出会い、海上自衛隊幹部候補生学校のロケなどを通して日本海軍に生涯をかけた松村淳蔵の魅力を解明。



薩摩藩英国留学生記念館
SATSUMA STUDENTS MUSEUM



鹿児島県いちき串木野市羽島4930番地 TEL 0996-35-1865 <http://www.ssmuseum.jp>

【開館時間】10:00～17:00【休館日】火曜日(火曜日が祝日の場合は翌日) 川内駅・串木野駅から無料送迎バス運行【要予約】

【観覧料】大人(高校生以上)300円 小人(小・中学生)200円 ※団体割引(20名以上)、障がい者手帳を保有するお客様は一律50円引き



1983年11月、米国大統領ロナルド・レーガンは、日本の国会で演説を行い、尊敬すべき日本人として松尾芭蕉、福沢諭吉、長沢鼎の三人の名前を挙げた。当時の日本で長沢鼎の名を知る人はほとんどいなかったが、大統領演説で「侍から実業家になった長沢鼎は私たちの生活を豊かにし、日米友好の歴史の中で特筆すべき」と敬意を表したことから広く世に知られるようになった。遠く離れた米国で「Grape King」、「Baron Nagasawa」と呼ばれた長沢鼎とはいったいどんな人物だったのだろうか？ 1852年、鹿児島城下で磯長孫四郎の四男・磯長彦輔として誕生。



2017年、山火事の被災後に焼け跡から見つかった長沢の刀は現在、サンタローザのワイナリー「パラダイス・リッジ」で展示されている。



時代は、 その少年に 何を望んで いたのだろうか。

KANAYE NAGASAWA 1852 - 1934



引き寄せ合う長沢の魂、 今新しい旅が始まろうとしている。

彼の没後90年、長沢の遺伝子を引き継ぐ者たちが、カリフォルニアに集結する。鹿児島に生まれ、焼酎づくりを学んだのち渡米。自力でワインメーカーへの道を切り拓いた石窪俊星氏。またカリフォルニアを代表するワイナリーでワインメーカーを務める赤星映司氏は、長沢の弟・弥之助の子孫に当たる。そして長沢とともにワインづくりに取り組んだ甥・共喜の子孫である伊地知ファミリー。今回の企画展では石窪俊星氏をナビゲーターに、彼のワインづくりにかける情熱や長沢への想い、長沢のワイナリー跡地に建つパラダイス・リッジでの三者の邂逅など、ゆかりの地を訪ね、多くの方々の証言を集めながら、長沢の人生～long long journey～の続きをドキュメンタリー映像やパネル展示で描き出した。2011年、開館に向けて展示資料の収集に苦闘していた薩摩藩英国留学生記念館は、先行きが見えない中、すぎる思いでカリフォルニアへ渡った。そこでの出会いがプロジェクトを大きく前進させることとなった。長沢の甥の御子女である、伊地知コウスケ氏とエイミー氏より提供していただいた貴重な資料がなければ、今の記念館は存在しないと言っても過言ではない。

13歳の時、藩より「長沢鼎」の名を与えられ最年少の薩摩藩英国留学生として渡英。その後、単身スコットランドで学んだのち、宗教家トーマス・レイク・ハリスの誘いで米国へと渡る。他の留学生が帰国する中、一人米国に残りコロニーで葡萄栽培やワインの醸造に取り組みながら40歳の時にカリフォルニア州・サンタローザのワイナリーを引き継ぐ。彼の醸すワインは高い評価を得て、カリフォルニアは世界有数のワイン産地へと成長した。移りゆく時代の波に翻弄されながら試行錯誤を重ね掴んだ栄光と失意の日々。孤高を貫いた日本人初の米国移民は、カリフォルニアの地で独身のまま、長沢鼎として82年の生涯を終えている。

